

令和 4 年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4090100308		
法人名	株式会社EPO		
事業所名	グループホームえん(さくらユニット)		
所在地	福岡県北九州市門司区田野浦二丁目9番33号		
自己評価作成日	令和4年9月30日	評価結果確定日	令和4年11月16日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php">http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートウリズん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	令和4年10月27日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

昨年度に引き続き、会社全体で身体拘束適正化、虐待防止、セクハラ防止の三委員会を立ち上げ取り組んでいる。同時に、研修推進委員会を継続して執行。職員に、より理解してもらい質の高い支援へとつなげるために研修内容についても掘り下げ実施に向けている。  
 ご入居者の生活はコロナ発生状況にあわせ、面会を予約式で実施したり、テレビ電話などでご家族との繋がりを継続した。落ち着いたころには、手作り弁当を持ち花見やドライブを楽しんだ。園内行事もできる範囲で楽しんで頂けるように職員全員で取り組んだ。  
 感染対策も継続して行ってきたが、8月にコロナ感染クラスター発生。現在、振り返りなど行いながら今後の感染対策、或いは事業継続対策に生かすために取り組んでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開所10周年となるグループホームえんは、各ユニットに理念を掲示し、運営者は理念の理解を深める講和を毎月の職員会議で行っている。今年度は、虐待に関する職員アンケートから、「今行っていることは援助ですか」とグレーゾーンを問いかける研修等を通じて、理念を具現化した質の高い支援に取り組んでいる。8月のクラスター発生時は市から訪問看護師の派遣を受け、職員が一丸となって乗り越え、自宅療養となった近隣の独居の職員にも弁当を届けている。一時は終末期を告知された入居者がクラスター発生時逝去されたが、4年間寝たきりにも関わらず褥瘡がないままの看取りに、家族から謝辞があった。運営推進会議は書面報告もあるが、入居者家族の口コミでの入居や近隣からの鉢植えの花の差し入れなどが継続し、階下の小規模多機能事業所とともに地域密着型サービス多機能ホームとして、家族や地域から篤い信頼を得ている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27) ○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,21) ○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40) ○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22) ○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12) ○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:30) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

## 自己評価および外部評価結果

ユニット／事業所名 **さくらユニット／グループホームえん**

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	研修推進委員会で昨年の理念研修を活かしつつ、質の高い支援に向けて研修を行うように計画している。毎月の職員会議では社長自らが理念の根本にあるものを踏まえた研修を実施している。	理念を各ユニットに掲示し、運営者は毎月職員会議に出席し、理念の理解を深める講和をしている。開設10年目の今年度は、虐待防止を中心にした研修等を通じて、理念を具現化した質の高い支援に取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	昨年同様、運営推進会議はコロナ発生状況にあわせ実施、あるいは報告書として生活の様子を知らせた。自治会などは必要に合わせ連絡をとっている。	地域小学校からの案内で、創立100年の記念花火の打ち上げを近隣の公園から見学している。階下の小規模多機能の利用から入居者に至る方も多く、近隣から鉢植えの花や手づくり作品などをいただき、訪問日は玄関にまゆはけ万年青が飾られ、ロバのパン屋の訪問販売を楽しんでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方たちに発信できる機会を持つことはできなかった。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	今年度も運営推進会議は数回の実施にとどまった。開催できなかった回は報告書で現状を伝えた。開催できた時は、少しでも皆さんの意見を聞くことができた。	開催中止時は、メンバーや家族に笑顔溢れる暮らしぶりの写真を掲載した会議録を送付し、8月のクラスターに関する報告には、慰労の言葉があった。開催時は、参加メンバーからマルシェ開催や台風の影響、インフルエンザに関する意見を伺っている。会議録は玄関で公表している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	今回のクラスター発生時には、職員への感染も著しく、ご入居者の生活支援に支障をきたす恐れあり、市の介護課に相談を行い派遣職員の確保ができた。	毎月、居室情報を担当部署にFAXしている。8月のクラスター発生時は、相談翌日から5日間派遣された訪問看護師から、介護支援を受けている。現在、週1回行政から配布された抗原キットで検査を行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束適正化委員会では、職員が身近に感じていることで問題提起を行い、理解を深めている。外部研修に参加した職員がその内容を内部研修として他の職員への周知を図った。	身体拘束に関する研修をオンラインで受講した新規職員がスタッフ会議で伝達講習をするなど、適正化に務めている。入居者の動きを止める声かけは会議で繰り返し話し合い、「待つて」の前に入居者が納得する声かけを実践している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	今年度は、研修推進会議で虐待に関してのグレーゾーンに視点を当てての全体研修を行うこととしている。日頃の生活支援の中で、今行っていることは本当に支援ですかと虐待についてより深く考える機会とする。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	詳しく学ぶ機会は設定できなかったが、外部研修に参加予定はある。研修後は内部研修として発表する予定である。	現在、任意後見制度を活用している入居者がある。自立支援事業や成年後見制度の活用を関係機関と協議を要する入居者はないが、随時説明できるように事業や制度に関するパンフレットを整備している。	さらに多様な家族構成が予測される昨今の状況から、自立支援事業、任意及び法定後見制度に関する研修で、内容やその違いに関する理解の促進を期待します。
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	できるだけ、契約前の説明でグループホームえんでの支援内容や重要視していることなどを説明。契約では、分かり易い言葉で内容説明を行うように心がけている。改定に関しては速やかにお知らせし了承を得るようにしている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご入居者の状態を電話やメールなどで知らせる機会が多くなり、その際にできるだけ意見などを伺うようにしている。	行事予定や春の花見や夏祭り、敬老会などの写真を満載した「明星新聞」を再刊したり、毎月入居者の近況を写真を同封して送付し、意見を伺う機会としている。入居者家族のロコミで入居した方もあり、ホームへの篤い信頼が伺える。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	疑問点などあれば聞いてくることはあった。各会議や委員会を設けたことで運営に関しての意見はより発言の機会が増えたと思われる。	毎月の階下の小規模多機能と合同の職員会議に運営者が出席し、率直な意見交換が行われている。職員の念願であったリフト付浴槽は来春全ての工事が終わる予定で、ユニット合同の会議ではクラスター発生時の残飯廃棄方法やCDが見れるテレビの変更など、入居者を中心とした検討が行われている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	今年度、就業規則、給与規定などは新たに改正を重ね明文化した。人事考課システムを継続して行い、昇給システムへの紐付けの実施が可能となった。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。 また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	様々な職員が介護という仕事を楽しみ、ご入居者と笑いのある時間をともにできることを誇りに携わっている。それぞれの生活状態にあわせ勤務形態を考慮している。	民間の人材紹介などで入職した20代～70代の男女の職員が、常勤や短時間のパート、夜勤専従や日勤のみと、個々の状況に応じて勤務している。今年入職した職員は、オンラインで身体拘束などの研修を受講し、今後は喀痰の吸引などの医療的ケアを学びたいと話している。クラスター発生時、自宅療養となった近隣在住の独居の職員にも厨房で調理した弁当を届けるなど、繋がりや思いやりのある職場となっている。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	ご入居者の人権尊重を啓発するために、まずできることから言葉の大切さを説明。敬語を使い、呼称に関しては、苗字で呼ぶことを習慣づけている。今後、徹底していく。	職員アンケートでは、頻回な尿意の訴えに「イラっとする」や、食が細い方にとこまで食事介助をすべきかななどの意見があった。虐待のグレーゾーンとして、「今行っていることは援助ですか」と問いかける研修を行っている。	行政主催の人権研修への参加や発行される人権に関する資料を活用した内部研修の開催で、さらなる人権教育・啓発活動を期待します。



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	今期も研修は殆どがリモートであるが設けている。他それぞれにあった介助の方法や言葉かけ、タイミングなど説明を加えながら指導している。現在も先輩職員からの指導も行っている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	同業者と交流する機会を持つことはできなかった。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご本人から困りごとや、不安などは聞き取りにくいが行動や日頃の話などから探っている。入居後さらに会話の中や関わりの中で安心した生活の提供に努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の困りごと、要望に添えるようにサービス計画を立てている。家族が見えていないところや今後考えられることなども詳しく説明してご理解いただけるよう努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	なるべく多くの情報から、今必要としている支援を見極めプランに活かしている。柔軟な対応でご本人に最適なケアプランの作成に努めている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	今までの生活歴や習慣などを知り情報を共有する事で、何もできない人ではなく「今まで出来た人」として知恵をお借りしたり、できることをお手伝いいただいたりしている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族との面会も限られる中で、電話の声やテレビ電話などでのやり取りでご入居者の表情が明るくなったりした。大事な絆を絶やさないようにした。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	新規のご入居者は医療連携において今まで馴染みのDr.に往診していただくことになった。他の外部との関係は途切れている。	コロナ禍の中、予約制で時間や人数を制限した面会を家族にお願いし、恒例の家族宛て年賀状作成を支援している。管理者は家族面会時の入居者の表情から、本人を共に支える家族との関係継続を支援している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずにご利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	日中は殆どのご入居者がフロアで過ごされ、テーブルやソファなど思い思いの場所でお話ししたり、声を掛け合って生活している。他の方の困っている様子や状態などが見受けられる時は職員に知らせてくださっている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了から暫くは連絡などがあり、近況などを知らせてくださる。相談や支援についてはサービス利用にかかわらず気軽に声をかけて欲しい旨を伝えている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	希望や意向の把握が困難な方が多く、日頃の会話の中や生活の中での気づきから思いを探るようにしている。ご家族の意見やこれまでの生活情報などから本人本位に検討し把握するようにも務めている。	入居時、家族に記載をお願いした生活歴や職歴に関する情報を整備している。日々のお話し会や関わりの中で、個々の入居者の思いや意向の把握に努め、入居者の妄想や言動をそのまま受け入れる関わりを実践している。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	階下の小規模からのご入居者に関してはこれまでの生活情報の提供を受けている。なるべく生活習慣などの継続を行うべくご家族にもご協力いただいている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	出来ない事よりも出来ることに視点をおき残存能力の維持ができるように職員間で情報交換を行っている。処遇を統一して継続して行っている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプランの更新前には職員会議でカンファレンスを行い、職員から多くの意見が聞けるようにしている。ご家族の意見、意向については面会時や電話の際などに伺うようにしている。	介護計画作成担当者が担当者会議で、入居者や家族の意向、モニタリング結果や気づきを話し合い、計画の作成や見直しをしている。適切な服薬管理などで、乳房疾患術後の経過観察や妄想を軽減し、前傾姿勢を改善し転倒を防止するために、訪問看護事業所の作業療法士のアドバイスを短期目標に組み入れている。	家族が理解しやすく納得できる介護計画を作成するために、入居者や家族の意向に連動する課題や目標の設定とともに、スモールステップできる短期目標や具体的なサービス内容の明記を期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録の入力はタブレットを使っており、記録の確認ができるようになっている。排泄記録に関しては誘導時間などの兼ね合いから一目できるようにペーパーに時間ごとに記録している。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	新しい情報交換や意見などを活かし、ご利用者に合ったニーズに応えられるように柔軟に対応している。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣の小学校から花火が上がる知らせがあったり、マルシェの再開では近隣の方の協力を検討しており、地域資源の活用に向けて取り組んでいる。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	今期新たにご入居された方は、今までかかっていたかかりつけ医に往診をお願いすることになり医療連携を図っている医師が4名となった。それぞれの医師と協力して適切な医療の提供を行っている。	協力医療機関から定期的な往診を支援しているが、中には任意後見人が受診に同行される入居者もある。訪問看護ステーションが協力医療機関に日頃の状況を前もってFAXし、円滑な医療連携で適正な医療受診を支援している。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	委託していた訪問看護ステーションを地元の門司の事業所に変更。週に一回の訪問看護を継続している。訪問には作業療法士の同行もあり、介助方法やリハビリについても指導、意見を頂いている。主治医との連絡も訪問看護を通すことが多くなった。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院に関しては変わらず、ご本人の生活情報などの提供を行っている。認知症状の進行を予防するうえでも早期の退院には協力的に行っている。退院後のカンファレンスにもご家族だけでは判断の難しいところが多く、必ず参加するようにしている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ご入居時に看取りケアを行う施設であることは説明している。状態変化を見ながら早い段階でご家族には改めて看取りについての説明を行っている。このグループホームでもできることも説明しご理解とご協力のもと支援していくようにしている。	一時は終末期を告知された入居者がクラスター発生時、逝去された。4年間寝たきりであったが、褥瘡もなくきれいなままでの看取りに、家族から謝辞があった。8年前初めての看取りを漫画形式でパンフレットを作成し、随時活用しながら、ホームでの看取りについて説明している。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアルを作成。入職時に説明を行っている。応急処置や緊急時の対応については日ごろからも指導している。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練は6月に総合訓練を行い、11月にも火災避難訓練を計画している。水害対策として建物裏面に側溝、ブロック壁増設する。	総合訓練では、避難済の居室のドアを開けておくことや避難に時間がかかると消防署から指導を受け、11月は夜勤帯での避難訓練を予定している。指定された避難場所や施設を熟知し、運営推進会議で災害時の協力をお願いしている。備蓄一覧表を整備し、食料品や飲料水を管理し、感染防止グッズ等を備蓄している。	自然災害や新型コロナウイルス感染症発生時の事業継続計画の作成に、日頃の訓練や今回のクラスター対応の振り返りを、活かされることを期待します。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけは改めて敬語を使うようにと指導している。声のトーンや目線などにも気を配り、呼称は必ず苗字で呼ぶことを徹底するようにして、職員の意識改善を行っている。	言葉遣いが大切であることを日々認識しながら入居者は氏名で呼称し、個々に応じた声かけを実践している。理念の「介護の仕事に夢とプライドを」を具現化するために、職員間の節度ある声かけも実践予定である。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定については日常の生活の中で希望を選択する形であったり、押し付けるのではなく「どうですか」と気持ちを問うように心がけている。自己決定の大切さなども職員に知ってもらっているようにしている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務などの見直しを行う際は職員側の都合からではなく、ご入居者にとってどうなのかを優先して内容を検討している。代り映えのない生活の中で少しでも笑顔で過ごしていただけるように、レクリエーションやお話し会等を行っている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洋服は職員が選んでいることが多く、季節感や好みなどを配慮して選んでいる。整髪や顔そり、毛染めなど行い、わずかなおしゃれを楽しんでいただいている。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	毎月一回の調理レクを継続。春はお弁当を作りドライブなどで外での食事を楽しんだ。毎週金曜日にはロバのパン屋の訪問販売でパンを買って食べることを楽しみにしている。食後の食器拭きは毎回手伝っていただいている。	階下の厨房で業者が調理したおせち料理やちらし寿司、ケーキバイキングを楽しみ、月1回入居者の希望のメニューを調理レクで作っている。口の中にため込み飲み込みができなかった入居者は、好物のせんべいを噛み飲み込め、それ以後経口摂取ができています。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事形態に関しては普通食、刻み食、ミキサー食で提供している。食事の進まない方には、一品ずつ時間をずらして提供したり、ご飯をおにぎりにして美味しいと感じて食べていただけるようにしている。水分補給の難しい方にはクラッシュアイスやゼリー飲料などを代用することもあります。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	訪問歯科は継続して利用。毎食後の口腔ケアは欠かさず行い清潔保持に努めている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	二人介助を行いながらもトイレでの排泄を行っている。排泄パターンを掴み、その方に合った時間に声かけや誘導することで失禁の回数が減り、不快感の軽減に努めている。	難聴などで男性職員の声掛けを無視したり、弄便や放尿などもあるが、声かけや見守りで転倒リスクを回避したり、職員を探すなどの落ち着いたサインを全職員で共有し、トイレでの排泄を支援している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	日頃の水分量の確保や軽度の運動、腹部マッサージなどを行うことで定期的な排便があるようにしている。緩下剤の使用も行いながら便秘予防を行っている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	希望のタイミングでの入浴は実現できていないが、入浴時間が楽しめるように入浴剤を使ったり、男性職員を気にされる方は女性職員が対応したりしている。新しく浴槽にリフトを設置でき今まで浴槽に浸かることができなかった方もゆっくり温まる事ができるようになった。	週2回を目途に入浴を支援しているが、車イスの入居者も来春にはリフト付きの浴槽で温まってもらう予定である。入浴以外の関りが功をそうし、同性介助希望は減っているが、寒いや面倒などの声には、「着替えだけ」などと声かけを工夫し、入浴後は「ありがとう」となっている。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ご自宅では、夜間眠れていなかった方も入居後は日中はお話ししたり、レクリエーションに参加されるなどで活動する事で生活リズムが整いよく休まれている。職員との関係性を高め安心した生活を提供できるように心がけている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医療連携によりご入居者の状態や変化に応じて速やかに対応できるようになっている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家事活動などはお一人お一人に合った内容を提供すること「できる」を増やせるようにしている。食べることに楽しみがあり毎週のろばのパンの購入やご家族からの差し入れを楽しんでもらうこともある。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で外出は思う通りにはできなかったが、今年は近隣での花見や施設の周りを散歩したりすることがあった。「どこか行きたいね」と話す中、春先は下関のリフレッシュパークや門司港の昭和レトロ館に出かけることができた。	天候の良い時は自宅近くまで散歩したり、下の公園まで散歩し花見をしている。感染緩和の時期は、入居者全員でドライブや花見に出かけている。新型コロナウイルス感染の収束の折には、玄関先のマルシェで、買い物をしたり地域の方々と交流できることをこころ待ちにしている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご入居者がお金を所持して使う機会はなかった。今月より、毎週のパンの買い物で各自で財布を持ち支払いまでしてもらおうと準備している。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	今期より、習字教室をはじめており年賀状は継続してご家族に送りたいと思っている。電話に関しては自らすことはないが、要望があればテレビ電話などで声が聴けるようにした。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	清潔な空間の提供とご入居者に合った室温などの空調調整を行っている。季節や行事に合った環境作りなどで季節感を感じていただけるように作品作りなどにも取り組んでいる。	感染防止に配慮し玄関のみ視認し、聞き取りとした。玄関の事務室窓口上には「笑顔愛語」の額、ウエルカムボードには「開所10周年」のポスターが掲示されている。エレベーターで上がると2階のユニット入口には外出時のスナップが掲示され、空調が管理された居間はラジオ体操やリズム体操、お話し会(女子会)の場となり、日中気のあった入居者同士で寛ぐ入居者の姿がある。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファでテレビを見て過ごされる方もいればテーブルでお話をしたり、手作業をしたりと様々である。時々、居間で休まれる方もあるがほとんどの方がフロアで過ごされている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	最近ご入居された方は、亡くなったご主人の遺影をおき、毎朝の習慣だったお仏壇に手を合わせるとことを継続できるようにした。お茶や水も毎朝上げている。他の方もご自宅で使っていたお茶わんや箸などを持ち込み使っていたらいている。	感染防止に配慮し視認せず、聞き取りとした。箆箆や椅子、家族写真が持ち込まれ、職員が整理整頓を支援しているが、中には自分で掃除機をかけたり、今秋の台風襲来時は伴侶の遺影を箆箆になおし込んだ入居者もあり、居室が投げり所となっている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	廊下やトイレは手摺りが設置されており、一人で移動ができる、或いは一部介助を受けることでトイレでの排泄が継続できるなどの残存能力の維持に努めている。安全に配慮し、整理された環境の提供に心掛けている。		